

2014. 6. 24 (木)

## 自由をめぐるって

渡 邊 勉

社会学部の渡邊です。社会調査や統計分析関係の授業を担当しています。研究分野は、職業や格差、社会的不平等などのテーマを専門としています。最近は、10年に1度実施される、社会階層に関する大規模な社会調査(SSM調査)のメンバーとして、調査研究をすすめています。

さて今日は「自由をめぐるって」というテーマですので、私の専門である格差の話と少し絡めながら、自由の話をしたと思います。自由に関わられる、あるいは自由に何かができるということは、何かとてもよいことだということに多分皆さんは考えるし、私も考えることがあります。ただそれは本当によいことなのでしょうか。

### 自由に選択するということ

自由というものを考えるために、まずその逆の状態、つまり自由に選択できないとか、自由でないという状態がどういうことなのかということについて考えてみましょう。それは、みなさんにとって例えば勉強することがそうなのかもしれませんが、何かやらされているとか、自分の意思に反して仕方なく何かやっているということが、自由ではないと考えるのではないのでしょうか。

話が変わりますが、戦前の日本を例にして考えてみましょう。私は今、戦時中の兵役をめぐる社会的不平等の問題について研究をしています。兵役と一口に言っても、徴兵、召集兵、志願兵というように、いくつかの種類があります。これらは、大きく2つに分けることができます。一つは徴兵検査を受けて、その結果本人の意思に関係なくすぐに徴集されたり、また何年か経た後に赤紙によって召集されたりするパターンです。もう一つは、自分から望んで軍隊に入ると志願兵というパターンです。職業軍人にならない限り、大体の場合はどちらのパターンであっても数年(多くは2、3年)の間、軍隊生活を送ることになります。

戦前、兵役というのは、建前としては喜ばしいことでしたが、本音ではできれば避けたいと考えている人が多くいました。家族と離れ、それまでの生活を突然中断し、仕事もやむなくやめなければならないのですから、避けられるものならば避けたいと思うでしょう。当時は徴兵忌避といって、逃げていた人もいました。ただその一方で、逆に除隊忌避という現象もあったのです。兵役期間を終了して、除隊していいと言われても、「いや、私は残りたい」という人もいたのです。彼らは、自分から残りたいと希望するのですが、

そうした話の裏には、実は帰っても仕事がなく生活できないといった背景があったりするので、つまり見方をかえれば、やむなく兵士という選択をさせられているとも考えられるのです。

志願兵についても、同じような背景がある場合があります。各市町村あてに志願兵の募集案内が来るわけですが、完全に自由に志願したい者だけが志願したのではなく、実際には各市町村には人数割当というのがあり、ある一定以上の人数の若者を志願させなければならなかったのです。要するに人数をそろえないといけない。だから市町村は、学校などを通じて、若者たちに志願してもらうように、積極的をお願いする。有望な若者の家には個別に訪問してお願いする。本人も家業のことを考えると、早めに兵役をすませて戻ってくるほうが、家族にも迷惑がかからないに違いないと考えるようになって、志願しようかという若者もたくさんいたわけです。

つまり除隊忌避をした兵士も、自ら志願した志願兵も、見かけは自らの自由意思によって兵士を「選択」したことになるのですが、実は兵士を選択せざるを得ない状況におかれている場合があったのです。ここで言いたいことは、実はわれわれが自由だと思っていることも、本当は自由に選択しているわけではないことがあるということです。自由な選択をしているつもりだけでも、社会の期待であるとか、貧しさであるとか、家を継がなければいけないとか、いろいろな制約のもとで、選択させられている、つまり本当は自由ではないという可能性もあるということです。

## 自由を阻害するもの

では真に自由に選択するということは可能なのでしょうか。私たちが大学に進学するか、就職するという選択は、私たち自身が選択しているように見えるけれども、実は親の職業であるとか、親の収入であるとか、そういうものによってかなり既定されています。我々の選択は、親から受け継いだ物質的なもの、精神的なもの、目に見えない多様な要因によって決まっている部分があるので。私たちは意識していないけれども、私たちの選択を知らず知らずのうちに決めてしまう要因が格差や不平等を生み出してもいるのです。それでは格差や不平等をなくし、人々が真に自由な選択ができるようになるにはどうすればいいのか。この問題に完全に答えられる解決策が今あるわけではありません。

しかし、自由な選択を阻害している要因を除いていくことは少しできるのかもしれませんが。例えば、みんなが裕福になれば、それは一つの解決になるのではないかと考えられます。親の収入や貧困が影響し、個人の選択を阻害しているのであれば、みんなが完全に裕福になれないとしても、貧しい人もできるだけ裕福になるという社会にすることが望ましいのではないかと思います。それは例えば、今の生活保護世帯に対する補助金を引きあげるとか、失業者に対する保険を充実させるとか、社会保障の制度を充実させるという解決策がありえますが、本当にそれだけでいいのでしょうか。つまりお金で解決できる問題なのでしょうか。

## ゲートッドコミュニティ

少し話が迂回しますが、最近、格差とか、貧困、富裕層といった話の中で出てくる話題の一つとして、ゲートッドコミュニティという話があります。これは主に裕福な人たちが自分たちの住宅地の周囲を高い塀で囲って、ゲートからのみ出入りできるようにするような地域を指します。アメリカには5万カ所もあるらしいです。中には、顔写真付きの居住者証明書がないと入れないような地域もあるとのこと。そういう所で暮らしている人たちにとっては、そのゲート中であれば安全が確保されているので安心だということになります。犯罪から自分を守るために、裕福な人たちが自分たちを守るための一つの手段として棲み分けしているのです。それは単に住む場所が違うということに止まりません。自分たちのためだけに、自分たちのお金を使う（税金も含みます）ということなのです。自警団を作ったり、警備員を雇ったり、警察並みの権力を持って警備ができる地域もあるとのこと。結局、自分の身は自分で守るということ。それはもう少し言いますと、他者を排除してでも自分を守るということなのです。

こうしたゲートッドコミュニティというのは、自分とは違う人たち、自分と異なる人たちは排除して自分たちだけの世界で生きていくコミュニティだと言えます。こうしたコミュニティに対して、自分のことしか考えていない、格差とか差別を助長しているのではないかという批判もあります。しかしそれが本当に悪いのかというと、その人たちは、自分にとって最善の選択として、ゲートッドコミュニティを作って、他者を排除して生きてい

くという選択をしているのであって、それ自体は悪くはないとも考えられるのです。もちろん、それとは別に、格差という観点から言えば、そもそもそういう所に住める人と住めない人がいるという問題がありますが、話がずれるのでここではその問題は取り上げないことにします。

## 格差と幸福

ゲートッドコミュニティにおいて、裕福な人たちが、自分たちのためだけにお金を使って、自分たちの利益、つまりは自分たちだけの幸せを求めて生きていくことが、本当によい事なのかについて考えてみたいと思います。格差研究では、こうした選択は、自分の首を絞めていることになっているということが明らかになっています。その一連の研究をおこなっている代表的な研究者として、リチャード・ウィルキンソンという研究者がいます。日本語訳でも『平等社会』（東洋経済新報社）、『格差社会の衝撃』（書籍工房早山）といった著書があります。

彼は、世界のさまざまな国の格差に関するデータや、アメリカの各州のデータを集めて格差が社会におよぼす影響を分析しています。その分析を通じて、格差の大きい社会（例えばアメリカに代表されますが）は、格差が小さい社会（代表的なのは日本だと言われています）に比べて、同じ程度の裕福な人を比べると、格差の小さな社会の裕福な人のほうが格差の大きな社会の裕福な人よりも幸せだし健康だということを明らかにしました。つまり例えばアメリカと日本の同じぐらい裕福な人たちを比べた時に、アメリカよりも日本人の方が幸せだし健康だということ

を明らかにしました。

これまで格差研究で言われていたことというのは、裕福な人は幸せで、裕福でない人は不幸せ、あるいはお金を持っている人は健康で、お金を持っていない人は不健康だということでした。自由という話につなげれば、裕福な人は自由に選択できて、裕福でない人は自由に選択できない、あるいは選択させられているということになります。こうした議論は、私たちはよく理解できるし、だから貧しい人に援助しなければならぬという話にもつながっていくのです。しかし実は格差の問題というのは、それほど簡単な問題ではないということです。われわれは格差のある社会の中の一員として生きています。われわれは一人一人がバラバラに生きているわけではなくて、社会の中でともに支え合ったり、対立したりしながら生きているのです。その社会の中で生きているということは、他者と何らかの関わりを持って生きているわけです。それゆえ自分だけが裕福でも、実はその人、その社会にいる人たちは幸せになれないということ、ウィルキンソンはさまざまなデータを通じて示したのです。

つまり、私たちは自分のためだけに自由に選択していれば、本当に幸せになれるかというと、実はそうではないのではないということなのです。社会全体が幸せになることによって、はじめて自分も幸せになれるということです。

### 他者との共存を認める自由

結局、この議論からわかることは、自由に選択できるということはとても大事なことなのですが、自由がよいことであるためには、

実はそこに条件があるということです。他者との共存を認めないような自由、自分の事だけしか考えない自由というのは、社会全体にとってよくないだけでなく、自分にとっても望ましくないということです。自分勝手な自由とは、これまで社会にとってよくないという言い方は数多くされてきたかと思うのですが、実はそうではなくて、自分にとってもよくないのです。

格差の問題というの、貧困の問題とか生活保護の問題とかということとは問題の捉え方が少し違うのです。貧困や生活保護の問題というのは、そこに貧しい人たちがいるということが見えるので、われわれには理解しやすいし、比較的発見しやすいと思うのです。それに対して格差というの、貧しい人がいて裕福な人がいるという分布の問題、つまり社会の配分の問題です。簡単に見えるものではなく、社会全体を俯瞰することで初めて見えてくるのです。それゆえわれわれは格差というものを意識していかないと、よく見えません。それゆえ自分が自由に選択していることが自分の不幸を招いているということに、なかなか気付けないのです。

### 最後に

今日は、私たちは自由に選択しているように見えて、自由に選択できていないという問題があるということを最初にお話ししました。その上で、それを解決するために、自由に選択できない阻害要因を除く、つまりみんなが裕福になるということの可能性を考えました。しかし、仮に裕福になったとしても、格差の問題から考えると、格差を容認し、他者との共存を認めないような自由、自分のこ

とだけしか考えない自由というのは、社会だけでなく、個人にとっても望ましくない結果をもたらすという話をしました。

私が今日用意した話はこれで終わりです。私自身は、格差の問題というのはどの社会にもあるので、ぜひ皆さんに興味関心を持ってもらいたいと思っています。格差の問題とは、実は自分と社会をつなげ、私たちに社会

を考えるためのきっかけをつくってくれる社会問題であると思います。そして今日話したように社会の格差の問題とは、自らの幸福の問題につながっているのです。その意味でも、今日の話が、今後格差の問題について、皆さんに考えてもらうきっかけになればと思います。

(社会学部教授)